

# ひとはなぜ戦争をするのか(その1)

柴田 晋平

2026年2月7日

## 1 はじめに

長い間「ひとはなぜ戦争をするのか」そして、戦争を防ぐ方法はないかというテーマについて考えてきましたが、最近の国際情勢を見て、ここで一旦、今まで考えてきたことを整理しておこうという気持ちになりました。

いろいろな論点があって整理が難しいので、なにか出発点となるものがあれば良いと考えて、「ひとはなぜ戦争をするのか」という題名で出版されているアインシュタインとフロイトの交換書簡の記録を使うことにしました。これは、1932年国際連盟がアインシュタインに依頼した「今の文明においてもっとも大事だと思われる事柄を選んでいちばん意見を交換したい相手と書簡を交わしてください」という企画によるものです。アインシュタインが選んだテーマが戦争であり、相手が心理学者のフロイトというものです。

物理学者と心理学者の会話で、私が初めて読んだ時、二人の議論が噛み合っていないような印象を受けたのですが、改めて読んでみるとそれは正しくなく、しっかりと噛み合った議論になっていて、現代の私たちの多くはなるほどと思える議論になっていると思いました。そこで、この書簡で交わされた論点を私なりにまとめて、それを現代の私たちがどう考えるかの出発点としたいと思いました。以下のまとめは私がこの書簡から理解したり感じた(おそらく不十分な)理解のまとめであって、アインシュタインやフロイトの意見そのものでないことを断っておきます。興味のある方は原典(翻訳あり)を読んでください。

皮肉なことに、この議論のすぐ後、ナチスドイツが台頭し第二次世界大戦が起こっています。二人はともにユダヤ人の血筋のため、アインシュタインはアメリカ、フロイトは英国にそれぞれ亡命しています。

参考文献

「ひとはなぜ戦争をするのか」, A. アインシュタイン, S. フロイト, 浅見昇吾訳, 2016, 講談社学術文庫, 講談社

## 2 利害対立の解決の方法

まず、利害対立の解決方法を見渡しておきます。ここでは、利害対立の原因はどこにあるか、どんな解決方法があるのか、といった議論には入らないで、まず、事実関係を抑えることにします。

出発点は以下の命題です。

人と人の利害対立	の	解決方法	は	基本暴力	です。
(原因)		(結果)		(手段)	

野生の動物はみんなそうしているし、動物である人間も基本は同じでしょう。ただし、人間は脳が発達したためにより複雑になっているので、上の命題について検討を加えていきます。

まず、原因となる利害対立ですが、チンパンジーがバナナを取り合うとか、子供がおもちゃを取り合うときは「利害対立」というような言葉でもよいですが、石油やレアアースを取り合って他国を侵略するということになってくると、利害対立というよりは欲望の対立と言ったほうが良いでしょう。

老子の思想に由来する「足るを知る」という規範が普及しているといいますが、それは無理のようです<sup>1</sup>。無限の欲望に駆られる人間がそこにはあります。これだけのお金があればまあ満足な生活ができるよねという収入ラインが満たされても、もしものこともあるかもしれないのでお金は貯めておいたほうが良いと言って、もっと稼ごうと考えます。もっといい〇〇が欲しいということもあります。貨幣経済が発展したので、お金がお金を生むという資本主義が発展して無限の欲望の傾向は極めてはっきりしました。ということで、原因のところは利害対立といった弱い言葉でなく、「無限の欲望の対立」と置き換えたほうが良さそうです。

つぎに、手段のところですが、動物世界、原始の世界であれば、ここは腕力・体力でしたが、人間では、兵器が作られたことで事態は変化し

<sup>1</sup>資本主義を乗り越えるためのヒントがあるとおもっていますが。

ました。兵器を考えだしたりする知力、兵器を操るスキル、軍隊を統率するスキルなど腕力以外のさまざまな能力が「力」となります。必要な能力はその時代や社会の状況において変化するでしょう。なので、全てを総合したより広範なものを含むものとして「暴力」という言葉を使うことにしましょう。腕力から始まって、兵器を使う力、軍隊の統率力、言葉の暴力、悪知恵、、など全てをふくめて「暴力」です。

最後に解決方法(結果)の部分ですが、もっとも基本になるのは相手を殺すこと。これによって、対立は二度と起こらないことが保証されますし、他者への抑止力(おどし)になります。しかし、歴史的には相手を殺さない作戦も使われるようになっていきます。十分に脅かしておいて働かせるという方法です。奴隷がそうです。民衆の家畜化ということばで表現される方法もあります。わかりにくい形で民衆を働かせ支配するという方法は現代ではより一般的と言えます。産業革命の時に、資本家の欲望のもと劣悪な労働環境が民衆を苦しめたことは歴史の時間に勉強したとおりです。現代の社会でも同様なことは続いています。

ここまでをまとめてみると、原因としては「人の持つ無限の欲望の対立」があり、手段としては「暴力」が使われ、結果として、相手を殺す、または、脅したり騙したりして労働させる(都合よく使う)ことが行われる、ということになります。

#### 改訂版

人と人の利害対立 の 解決方法 は 基本暴力 です。		
(原因)	(結果)	(手段)
無限の欲望の対立	殺す 労働させる	高度な暴力 (兵器など)

実際には次のステップがあると考えられます。相手を全滅させるのではなく、生かして利用する方法の場合、反乱が起こりえます。王や一部の支配層が「暴力」を使って欲望を満たしている場合、多くの民衆が団結することで大きな力を持ち、支配に打ち勝つということが起こりました。数々の歴史的事実があります。

そこで新しい手段として「法による支配」という考えが出てきました。一つの国、あるいは集団が一つの法の下に運営され利害を解決しようというアイデアです。といっても法に従わせる力は最終的には「暴力」です。また、社会の人間集団が団結心を持って、同じ考えの絆で繋がれて、みんなが納得する立法がおこなわれるというのは美しい理想像ではありますが、社会の集団は一様ではありません。男もいれば女もいる、大人

も子供も、好きなことも皆違う人間なのでそういった理想は実現不可能です。結局は、「法による支配」も一部の支配者の都合の良いように作られた「暴力」の一種になります。

改訂版 2

人と人の利害対立 の 解決方法 は 基本暴力 です。		
(原因)	(結果)	(手段)
無限の欲望の対立	殺す	高度な暴力
	労働させる	(兵器など)
	民衆を支配	(法)

### 3 戦争は回避できないのか？

実際に行われている利害対立の解決方法をざっと見たので、もともとの疑問「なぜ戦争をするか」に話を進めましょう。

アインシュタインが考えたことというのは、私の理解では次のようなことだと思います。

結局の話、「人間の心に問題があるのでないか？」これをもう少し分析すると、(1) 権力欲を持った指導者が現れて、(2) その指導者に協力する金銭的な利益を追求する集団が現れ、戦争をすればいちばんの被害を受ける大多数の人々が上記の集団の指図に従ってしまう、というプロセスが現実には起こっています。疑問としては、(3) 大多数の人々が指図にしたがってしまうのはなぜか、もしかして、(4) この裏には、相手を殲滅したいというような欲望(本能)が潜んでいるのではないか。その本能があるとして、(5) この本能を引き出すことがなぜできるのか？が次の疑問です。そして、(6) 憎悪や破壊に人の心が向かうことを止めることができるか？これは、教養のない人を啓蒙すればということではないと考えられて、それは、実際に知識人がかえってこの暗示にかかってしまうことが多々あるからです。

順番に行きます。突然別の視点になってしまいましたが、私たちの生は受け身です。ですから、生まれた時点で生きる目的はないのがデフォルト(既定)です。ラッキーにも自分の何かの才能を自覚できた人は、「僕は一生、自然科学をやろう」とか「一生、野球で生きよう」のような意識をもちます。スター的なひとでなくても「子供が好きなのでずっと子供相手の仕事をしよう」といったことも含めて。そう言った目標を持つ人は幸せです、と普段は考えています。その中の一つのタイプとして、

「他の人たちよりも自分の力が優っている」と考え指導者になれると自覚する場合があります、それが独裁者の出現につながると思われます。「俺について来い！」的な気持ちになる人です。したがって(1)の指導者の出現は自然現象と理解できます。

人がもっている「無限の欲望」から(2)の指導者の取り巻киが発生するのも自然です。フロイトは「人は指導者と従属するに分かれるもの」と書いています。たしかに、「俺は指導者に向いている」と思った人が色々言い出せば、大多数の人は面倒臭いので長いものにまかれろということになり、あまり考えもせずに従うのが普通です。(3)の従う層ができるのも自然でしょう。とはいえ、同意したくないのに同意してしまうのはなぜかという問いが(4)の疑問に関係しています。相手を殲滅したいとい本能的な欲望があると考えられて、それが指導者に同意するように誘導する力になっているとフロイトは指摘しています。独裁者はプロパガンダで上手に同意を引き出しています。

フロイトは書簡の中で「人間の攻撃的な性質を取り除くことは出来そうにない」と言っています。

人と人が結び合いたい、絆で結ばれていたいという欲動、あるいはフロイトの言葉では性的な欲動がありますが、それに対して、攻撃本能、破壊欲動もあります。ただこの性的な(あるいは生きる欲動)と破壊欲動(あるいは死の欲動)は対立するもの、善と悪という関係でないことは明確だと思います。愛するものを得るためには、途中にあるものを排除したり破壊したりする必要があります。生きるためにはそれを阻害するものを倒す必要があります。両者はセットとして両方必要です。今、愛のために攻撃が必要という論理をしましたが、逆もありそうです。破壊欲動を満足するために愛の欲動が必要という関係もあるとおもわれるからです。周囲を破壊したり、相手を殺したりすると、そのイメージが自分に向けられ、自分も殺され破壊されたりするのではないかという恐怖に襲われるので、自分を守ってくれる愛が欲しくなると思うのです。なので破壊ばかり強くてもだめだし、愛ばかり強くてもだめという関係だと思われます。

私は自然界には引力と斥力があり、そのバランスの中でこの世界があるというイメージをもっていますが、愛と破壊の関係はそれに近いものです。引力と斥力の戦いの中で、私は引力/愛/絆の味方をしたいと思っていますが、その横にはかならず引き裂く力、破壊が寄り添っていると考えるのが良さそうです。愛する欲動を強くすれば破壊する欲動も強くな

ります。

人と人の間の引力、愛、で戦争を無くすることは理想論であって実際にはできないというのが結論です。

フロイトは「文化」という言葉を持ち出します。「文化の発展を促せば、戦争の終焉へ向けて歩み出すことができる！」でフロイトの書簡は締めくくられています。

ここでいう「文化」が何をさしているかは私はよくわかりませんが、「文化」が発展すると人類が滅亡するかもしれないようなものだと思います。「文化」が発展することで人類の性的機能が損なわれていることを指しています。現在の少子化はまさにこのことです。「文化」発展が人間の心のあり方に変化をもたらし、ストレートな本能的欲望に導かれた行動が減ってきていると言います。「文化」発展が人間の心と体に変化をもたらし、それが戦争に対する嫌悪感を生み出しているのではないかと考えています。

最初の命題の原因の部分、つまり、人間の欲望の性質が変化しないと解決しないといけないという結論になりそうです。

## 4 具体的な行動指針にむけて

ここまででいくつかの重要なピースが揃ったと思うので、もう少し細かく見ていくことにしよう。ここでも(話が指針を失うことのないように)ガイドとなる書籍を利用します。日本平和学会編(2018)「平和をめぐる14の論点」(法律文化社)。この本は社会の動きについて具体的に平和に向けた活動の意義を検討しています。

### 4.1 「平和を欲さば、戦いの準備をせよ」は正しいか

「平和を欲さば、戦いの準備をせよ」という有名な格言があるそうです。これは正しいかというのが最初のテーマです。国防や防衛力強化はいつも政治の話題になっているので、これに対するしっかりとした考えをもっておきましょう。この格言の意味はいろいろあり得ますが、普通は「抑止論」と理解されています。武力を持って相手を脅しておき、相手が戦争を始めることを思い止まらせることができるとする考えです。この考えに一理あることの歴史的な証明として、ペロポネソス戦争において中立を求めたメロス島がアテナイによって滅ぼされた例があるそうです。

#### 4.1 「平和を欲さば、戦いの準備をせよ」<sup>4</sup>は具体的な行動指針にむけて

一方、国が互いにこの考えを持てば、相手をみて軍備を拡張することがとめどもなく続くことも歴史的事実で、これは「安全保障のディレンマ」と呼ばれます。相互不信の高まりは戦争の可能性を高めますし、軍拡の末に起こる戦争の規模は大きく、被害や犠牲がとて大くなります。

「安全保障のディレンマ」の原因はそれほど難しく無いと思います。国と国の関係よりも人と人との関係で理解するとわかりやすいと思います。人(動物としての一つの個体)は、自分の生命を守り生き続けるべしというデフォルト設定(本能)で生きています。周りの個体が同じ本能で生きているので、利害対立があればいつ殺されるかもしれないという恐怖があり、対策として戦いの準備をします。

この問題の解決は人と人との関係ではすぐにわかります。それは相互の信頼です。相手がこちらを攻撃してこない、利害対立があっても互いに妥協できる結果がえられるという信頼関係があれば「安全保障のディレンマ」は解消されます。これは家族のような小さい集団では実際に可能です。国と国の関係でも武力侵略のおそれがない信頼関係があれば「安全保障のディレンマ」は生じません。実際、EUや米国とカナダの国境には軍隊はいませんし、自由に往来ができます。

人と人についての「安全保障のディレンマ」に話を戻すと、家族のような小さい集団では解決できますが、少し大きな集団、ご近所さん、村の中、会社の中、、、国の中、になってくると簡単にはいきません。大きな集団ではいろいろな人がいますから、利害対立が信頼関係で解決できなくなります。この場合、支配者あるいは支配層が強い武力を持っていて、その脅しによって利害関係に決着をつけて「安全保障のディレンマ」を解決します。日本のように身を守るために銃をもつことができない約束ができていた社会ではこれはかなり容易です。法の支配があって大きな警察権力で支配者が抑止力を行使すれば、人と人との間には発生する「安全保障のディレンマ」が解決されます。

武器を誰もが持てる状態になればその集団はかなり不安定で、「安全保障のディレンマ」の解決は難しくなります。それでも、支配者あるいは支配層が強い武力による抑止力をもって、一つの集団を維持することはできています。そのような集団で一番大きなサイズが国です。それがうまくいかないと内戦状態になります。

大きな人間集団で「安全保障のディレンマ」をなんとか克服できる条件は二つあると思います。ひとつは、支配者または支配層が圧倒的武力を持っていること。もう一つは、支配される民衆が支配層の存在を「ま

#### 4.1 「平和を欲さば、戦いの準備をせよ」<sup>4</sup>は具体的な行動指針にむけて

---

あいいか」と認めていることだとおもわれます。一つの国の中でこの条件が二つとも満たされていれば国として成立します。さて、同じことを国際関係において考えることができるでしょうか。圧倒的に強い武力を持つもの、各国が「まあいいか」と思えるようなもの、たとえば、国連の安保理や国際法のようなもの、はいずれも地球上に存在しません(試みられていますうまくいっていません)。したがって、国を作ったのと同じ方法では、国際社会における「安全保障のディレンマ」は克服されないことになります。

地球全体としての信頼関係があれば「安全保障のディレンマ」は解消されることはわかっているのですが、地球全体という大きな集団でこれは非常に難しいと言えます。国自身が独裁者をもつような体制の場合、信頼関係を作ることはさらに困難になります。しかし、EUのような関係が各地域で作ることができる可能性は否定できないでしょう。

これは補足ですが、世界が支配者あるいは支配層で一つの国のようになる可能性はありますが、その体制は不安定であることは歴史的に証明されているので、解決策の一つとしては私は考えていません。

世界のすべての国で、国内ではなんとかぎりぎり容認できる範囲の信頼関係で「安全保障のディレンマ」は克服しており、すべての国同士の関係もなんとかぎりぎり容認できる範囲の信頼関係が持てるようにするというのが現実的な目標でないかと思われます。

(つづく)